マーティン・ジェイとジャック・デリダ ——『うつむく眼』の後で——

亀井 大輔*

マーティン・ジェイは大著『うつむく眼——20世紀フランス思想における視覚の失墜』（原著1993年）を準備する過程で、彼が同書で論じる現代フランスの思想家のうちの数名と対話をする機会をもち、「したがって私は、たいていの歴史家が経験するよりも活発な地平の融合——あるいは少なくとも相互作用——を経験することになった」（DE 18/18）とその序論で述べている。対話者には、カリフォルニア大学バークレー校でジェイとかつて同僚であったミシェル・フーコー、リュス・イリガライ、ジャック・デリダ、ジャン＝フランソワ・リオタールといった思想家が含まれる。なかでもデリダとジェイとの関係は注目に値する。というのもデリダは『うつむく眼』の議論に登場する思想家のなかで、その内容に応答した唯一の人物だと思われるからである。以下では、ジェイとデリダとのあいだで直接もしくは間接に交わされたやりとりの跡をたどりながら、この二人の思想家のあいだで争点となっていたものは何かを浮かび上がらせ、両者の関係を掘り下げるための準備作業としたい。

1 デリダからの手紙

『うつむく眼』刊行をめぐるデリダとの関係については、ジェイ自身が「デリダの声が聞こえるのをまだ待っている」（『境界からの試論——パレルガと

*立命館大学文学部准教授

パリポメラ』)と題されたエッセイのなかで回想している。まず、これを手がかりにその関係をたどっておこう。

ジェイは『うつむく眼』の第9章「[ファルス - ロゴス - 視覚中心主義]——デリダとイリガライ」において、前半はデリダ、後半はイリガライについて論じている。デリダについては、その初期の現象学や構造主義に対する議論に始まり、エクリチュール論や隠喩論を経て、写真や絵画といった視覚芸術を論じた著作にいたる数多くの著作を取り上げて、デリダの視覚をめぐる複雑な態度を描き出している。それに続いて、デリダの脱構築に大きな影響を受けたフレンチ・フェミニズムのなかから、イリガライの思想について後半で論じている。

この2名の思想家について、ジェイは先のエッセイで次のように語っている。「この本が組版されている間、私は彼ら〔デリダとイリガライ〕に話をする機会があり、完成後、彼らに本を送った。イリガライからは何も返事がなかったが、1993年10月に、本が届いたことを記したデリダからの手紙を受け取って感激した。それまで私の彼との関係は間接的で距離を置いたものだった(…)」(EE 124)。ところがジェイによれば、デリダの手紙は独特の文字で手書きされたもののため、きわめて判読が難しく、75パーセントしか判読できなかった。しかし、このことはむしろ、透明なコミュニケーションよりもテキストの決定不可能性というデリダの教えを実演していることがらとジェイは考え、次のように述べる。「しかしこの〔手紙を判読するという〕任務をさらに遂行するよりも、私は手紙を大部分は判読できない状態にとどめることにした。(…)実際、12年経った今も、彼の仕事に対する私の説明に関してデリダが実際にどう言っていたのか、まだ十分に分かってはいない」(EE 126)。このエッセイのタイトル「デリダの声が聞こえるのをまだ待っている」はデリダが亡くなった後もそのことが続いていることを表現しており、2004年に亡くなったデリダへの見事な追悼文にもなっている。

このエッセイを収録した論文集『境界からの試論』(2011年)の序文によ

れば、その後ジェイが『うつむく眼』についてのデリダの応答をよりはっきりと知ったのは、このエッセイを書いた後だということである。「皮肉なことに、彼の〔『うつむく眼』に対する〕判断がより明らかになったのは、デリダの死後、そしてこのコラムの刊行後であった。それは彼の2000年の著作『触覚——ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』の脚注のなかにあり、私の眼に留まったのはそれが〔2005年に〕英訳されてからのことである。」(EE 6)

こうして、ジェイは『うつむく眼』についてのデリダのコメントを目にすることになる。次にそれを検討しよう。

2 デリダの応答——視覚の権威剥奪／脱構築

デリダは『触覚——ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』（2000年）のある注で、『うつむく眼』を「非常に豊かな著作」と好意的な評価とともに参照している。その全文を引いておこう。

同じく、私はマーティン・ジェイの非常に豊かな著作を参照しておく（私の考えは、ジェイが「ファルス-ロゴス-視覚中心主義」について書いていることに特に近い、と私は感じている。たとえ、間隔化＝空間化という脱構築的思考が、そのきわめて不安定で、反転に従属した論理において、聴こえるものについてのいくつかの解釈に反対して、見えるものに訴えるのでなければならぬとしても）。(TJLN 162 (1) /299 (2))

この文章から、デリダはジェイの議論に対してきわめて肯定的なしかたで応答していることは明らかである。この注以外にも、デリダは『うつむく眼』を計3箇所参照しており、ジェイの書物がデリダにとって重要な参考文献であったことは容易に想像できる。

しかし、それ以上にここで注目したいのは、デリダがジェイへの賛意を示した後で付け加えているある留保の内容である。デリダは先の注で、間隔化＝空間化 (espacement) の思考を見えるもの＝可視的なものと結びつけている。このことをさらに理解するために、『デリダ、脱構築を語る』というデリダの著書を参照したい。これは、『触覚』を刊行する一年前の1999年に、デリダがオーストラリアのシドニーで行なったセミナーの記録であり、2001年にシドニーの出版社から刊行されたものである。「視覚を脱構築する」と題されたその第一部においてデリダは、視覚の問題についてテリー・スミスの質問に答える形で話を進めるなかで、ジェイの『うつむく眼』に二度言及しながら、西洋哲学における視覚の優位ないし権威について次のように語っている。「この〔視覚的なものの〕権威は多くの人々によってさまざまな仕方而言及されてきました。そして、後で立ち戻るつもりですが、私自身もある留保とともに、それについて言及してきた者の一人です。」(DESS 19/13)

このように西洋における視覚中心主義の存在を認めながら、デリダは視覚の構造について次の二点を指摘している。一点目は、見えるもの＝可視性のなかに見えないもの＝不可視性が内在的に含まれるという構造があるということである。これについてデリダは、メルロ＝ポンティの『見えるものと見えないもの』を参照しており、これはジェイの『うつむく眼』第5章でのメルロ＝ポンティについての議論と重なる。二点目は、直観の権威は、たんに視覚の権威に結びつくだけでなく、触覚にも結びつくということである。

ここで第二の厄介な〔＝複雑な〕問題が生じてきます。ことはそれほど単純ではありません。なぜなら、不可視性が見えるものの媒体であるからだけでなく、直観の(直観主義と形式主義、等々のあいだの対立や映し合いを越えて、私にとっては哲学の本質そのものである直観主義の) 支配的権威、直観的知の権威は、たんに視覚の権威ではないし、つまり、見えるものを、感覚的なもの、あるいは可知的なものとして見ることの

権威ではないし、また、一度もそうであったことがないからです。この権威は、触れることも、すなわち接触の直接性と言われるものも巻き込んでいのです。(DESS 20/14)

ここからデリダは、ジェイのいう「視覚の権威剥奪」に対して自らが一定の留保をしている理由を語り始める。デリダによれば、視覚中心主義の問題は、視覚、聴覚、触覚といった諸感覚のあいだで、視覚が他の諸感覚に対して支配的であるという感覚の間の序列の問題ではない、つまり諸感覚のうちでどの感覚がもっとも優位を占めるのかという問題ではない。問題となるのはむしろ、視覚にも聴覚にも触覚にも含まれる接触の直接性の権威だということである。したがって、デリダが視覚の権威は触覚を巻き込むと主張するとき、それは感覚のひとつとしての触覚が視覚に取って代わるわけではなく、諸感覚に含まれる直接性——すなわち直観、自分が話すのを聞くことの直接性、触れるものと触れられるものの同時性、といったもの——を意味するのである。

デリダはこうした考えにもとづいて、感覚の直接性のなかに間隔化や痕跡を読み取る。そして、メルロ＝ポンティのように諸感覚の未分化な原初的狀態に遡ることを避けて、諸感覚を可能としているテクノロジー的、人口補綴的な構造をそこに読み取るのである。これをデリダは「他なる読解」と呼んでいる。

こういうわけで、私は、まさに最初から (…) そしてずいぶん昔に、〈書く〉こと [=エクリチュール]、痕跡、差延、グランメー (gramme) といった概念を、すなわち、いわゆる直観的な諸感覚 (空間的なあるいは時間的な、〈見る〉、〈触れる〉、〈聞く〉) のあいだの、今言ったような終わりのない競い合いからできるだけ無縁であるような、他なる読解を、練り上げる試みを始めたのです。つまり、〔空間的な直接関係と思われ

ている] 結合／接続の〈間隔空け〉としての、[そして時間的連続性の] 〈中断〉としての、空間化・疎隔化 (*spacing*) (空間的次元と同じく時間的次元における空間化・疎隔化 (*espacement*)) を強調しましたし、かつまた他の〈痕跡〉というもの(コントラスト化としての〈見る〉ことの伝統的概念にとって必要とされる、現前という直観的充実を伴わないもの)を引き合いに出しました。それによって私は、じつのところ、マーティン・ジェイが二〇世紀のフランスにおいて私たち全員がそうしていると想定したのとは違って、視覚から、そしてもちろん空間からも権威を剥奪しないようにしてきたのです。(DESS 22/18)

このようにデリダは、ジェイの『うつむく眼』を受けて視覚中心主義に対する自らの態度を明らかにしている。この発言を先の『触覚』の注と結びつけるならば、間隔化が見えるものに訴えるとデリダが述べる理由は、間隔化が可視性を開くものだからである。したがって、間隔化は視覚の権威を剥奪するものではなく、視覚の可能性を条件づけるものなのである。

以上からまとめると、次のように言えるだろう。ジェイが20世紀フランス思想の動向とみなす「視覚の権威剥奪」が、視覚の優位を攻撃する反視覚中心的なものとされるのに対し、デリダの「視覚の脱構築」は、視覚の権威を攻撃するのではなく、視覚を可能にする間隔化の運動を見出すことで、視覚を含めあらゆる感覚に共通する触覚的直接性をずらしていくことにある、と。

3 ジェイとデリダのあいだの地平の融合

このように、ジェイが『うつむく眼』で描き出す「視覚の権威剥奪」のフランス的系譜にデリダは基本的に賛同しつつも、自らがそのなかに所属することについては留保を表明している。とはいえ、以上の整理を両者の関係に

についての結論とみなして終わるならば、ジェイが言う意味での両者のあいだの「地平の融合」を解明したことにはならないだろう。以下では、ジェイとデリダの著作を紐解いて、両者の関係をさらに考察するための手がかりをいくつか示すことで、稿を終えることにしたい。

まず指摘しておきたいのは、こうした視覚に対するデリダの態度をジェイはほぼ正確に捉えているということである。『うつむく眼』においてジェイは、デリダの視覚への態度を単純に「批判」という言葉で表現することはできないと述べ、彼の態度を「二重の読解」と呼んでいる。これは先に引用したデリダの「他なる読解」と異なるものではないだろう。

また次のように、ジェイはデリダの議論が感覚の序列化ではないことを見抜いている。「視覚の直接性にどれほど不満だとしても、他の諸感覚が生み出すよく似た効果に対してもデリダは批判的だ」「いかなる感覚も、それが現前性の効果を生み出すかぎりでは、脱構築を必要とするのである。」(DE 501f./450)

「むしろ彼は、ニーチェと同様に、諸感覚にいかなる序列をつけることにも反対し、それに代わって感覚どうしの相互依存関係を探求しようとした。」「もっとも魅力に抗しがたいと思われたのは触覚と聴覚である。」(DE 511/459)

ジェイはこのようにデリダにおける諸感覚の関係を描き出しており、「視覚の権威剥奪」という言葉では表現できないニュアンスをそれに与えている。ジェイがデリダの言うような十把一絡げの捉え方をけっしてしていないことは、これによって確認できるはずである。

他方、ジェイに対するデリダの応答についても興味深い点をひとつの仮説として指摘したい。すなわち、デリダが『触覚』を執筆するにあたって、『うつむく眼』がその参照物のひとつにとどまらず、スプリングボードの役割を果たしたのではないと思われることである。ジャン＝リュック・ナンシーを論じたものである『触覚』は、もともとは『うつむく眼』刊行よりも前の

1992年に執筆され、1993年に英訳が雑誌に掲載されたものを原型としており、その後大幅に加筆され2000年に刊行されたものである。この大幅な加筆の過程で、デリダがジェイから何らかの刺激を受け取ったのではないか。例えば、デリダはそこで（フランスにおける、ではなく）フランスとイギリス、ドイツとの国境、境界線上で、西洋哲学における（視覚中心主義ならぬ）「触覚中心主義」の系譜を描き出しているが、この考察は『うつむく眼』の哲学的パロディのようにも見えるのだ。デリダは次のように、『うつむく眼』を意識するかのように、一種の「冗談」として次のことを語っている。

というのは、本書の主張もしくは仮説の一つは（もちろん冗談だが）、触覚にかんする一つの事件、一種の陰謀、哲学的策略が、ヨーロッパで、いくつかの国境に沿って——その境目は触覚の比喩形象である——、フランス国境で、フランスとイギリスのあいだで（…）、フランスとドイツのあいだで、すなわち一方のカントとフッサール、他方のメヌ・ド・ピラン、ラヴェッソン、ベルクソン、メルロ＝ポンティ、ドゥルーズのあいだで起こったのだらうということだからである（…）。(TJLN 159/265)

こうした箇所に着目しながら、ジェイの『うつむく眼』とデリダの『触覚』を併せ読むならば、視覚と触覚をめぐる両者の争点をさらに掘り下げることができるに違いない。

追記：以上はマーティン・ジェイ氏を招いたシンポジウムで発表した内容に、若干の改訂を施したものであり、本誌に掲載した英語版とは異同がある。本稿は問題の所在を示そうとする導入的なものにとどまっているが、そこで述べたように、筆者にとって『うつむく眼』は、デリダの『触覚』というテキストへのひとつのアプローチをもたらすものでもある。ここで提示した仮

説については、デリダのメルロ＝ポンティ理解をめぐる争点を含め、今後取り組む課題としたい。

なお筆者は、このジェイ氏を囲むシンポジウムの3ヶ月後、ブルガリアのソフィア大学にて開催されたシンポジウム“Derrida-Forefront”(2018年6月)に参加したが、発表者の一人 Zhana Damyanov 氏は、デリダにおける notion と concept の違いについて考察し、そこで偶然にもジェイの『うつむく眼』とデリダの『触覚』を並べて参照していた。単純に言えば、notion は視覚と、concept は把握する手の動き、すなわち触覚と結びつくことということである。このような視点もまた、この問題に着手する手がかりをもたらすものであり、筆者にとって示唆的なものであったことを記しておきたい。

略号

Martin Jay

DE: *Downcast Eyes. The Denigration of Vision in 20th French Thought*, University of California Press, 1993. [『うつむく眼——二〇世紀フランス思想における視覚の失墜』、亀井大輔・神田大輔・青柳雅文・佐藤勇一・小林琢自・田邊正俊訳、法政大学出版局、2017年]

EE: *Essays from the Edge: Parerga and Paralipomena*, The University of Virginia Press, 2011.

Jacques Derrida

TJLC: *Le toucher –Jean=Luc Nancy*, Galilée, 2000 [『触覚——ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』、松葉祥一・榊原達哉・加國尚志訳、青土社、2006年]

DESS: *Deconstruction Engaged. The Sydney Seminars*, ed. Paul Patton and Terry Smith, Power Publications, 2001. [『デリダ、脱構築を語る——シドニー・セミナーの記録』、谷徹・亀井大輔訳、岩波書店、2005年]